

ソビエトのレクリエーション・レジャーに関する語義

A Study of the Theoretical Views of Leisure and Recreation in USSR

佐 野 裕*

Hitoshi SANO

SUMMARY

The problem of free-time is a socio-economic phenomenon.

Scholars in the Soviet Union assert that the length of the work day in capitalist countries is decided by the struggle of the working classes opposite to the capitalist classes, whereas, on the other hand, socialist societies it is decided by the historical stage of the social productivity. So under capitalism leisure is opposite of work.

In addition, they say that the concept of leisure in a capitalist society is understood as absolute freedom, i.e., the desire to live an easy life, characterized by self-abuse, self-centeredness, self-indulgence etc., as is expressed by the Russian phrase "lichnyi proizvol" —личный произвол—. And again they say capitalism transforms the free-time from a resource for the all-round development of man to a means to make profits.

It is often said under capitalism the work ethic has declined: leisure is seen as the aim of life, and work as merely a means to that end. But in the Soviet Union work is a primary need for man, for example, Г.Е. Боровский said that work is an essential practice for human being to develop intellectually and physically, but free-time only makes some necessary and supplemental conditions for all-round development of man (quoted from Б.И. Дубсон¹⁾).

は じ め に

現代社会のアクチュアルな問題として、1950年～1960年代以降、高度に発達した先進資本主義諸国や社会主義国において、レジャー問題が顕在化した。労働時間の短縮に伴う自由時間の増大、いわゆる「マス・レジャー」の問題である。改めて論ずるまでもなく、それは T. ヴェブレンいうところの従来の有閑階級の占有物としてのレジャーとは異なるレジャーの大衆化と時間的量的拡大としての大量化を含意する。

資本主義諸国における理論的特徴の概要は、こうした社会の到来を脱工業化社会、高度情報化社会等と規定し、資本主義とか社会主義の対立の時代ではない新しい時代が到来し、イデオロギーは終焉すると主張する。現代社会の人間疎外現象はレジャーによって解

* 横浜国立大学, 教育学部, 保健体育教室
(Dept. of Health and Physical Education)

消されんとする理論がその哲学的基調音となっているといえよう。これに対して社会主義社会における労働時間短縮への志向は、資本主義社会とは異なると説明されている。ソビエトは資本主義社会における労働から社会主義的労働の性格を峻別する。即ち資本主義社会における「労働とは、被支配階級の人々にとって、労働者の現実性剝奪として現われ、対象化が対象の喪失および対象の奴隷たることとして、わがものとする獲得がよそのものになる疎外として、手離す外化として現われる²⁾」労働との関係において、従来の労働の倫理は変容し、仕事中心の生活観からの離脱が人々の生活意識として一般化しつつあるのに対して³⁾、ソビエトでは「自由の国は、窮乏や外的な合目的性に迫られて労働するということがなくなった時に、はじめて始まるのである。それは当然のこととして本来の物質的生産の領域の彼方にある」としながらも、それはただ必然性の国(労働)をその基礎としてその上のみ花を開くことができると⁴⁾、人間の本質的活動としての労働に第一義的意義を認めている。

ソビエトの自由時間問題に関しては、J. ツーザニク⁵⁾、P. ホランダール(江藤訳)⁶⁾、辻村⁷⁾、寺谷⁸⁾、岡田⁹⁾、Г. В. オシポフ(田中訳)、らによってわが国に紹介されている。

J. ツーザニクは1920年代以降、今日に至るまでのソビエトの自由時間の量的、質的変化、研究動向を歴史的に素描し、年令別、職業階層別、教育水準、家族構成別その他様々の角度からソビエト国民のレジャー時間の様態、レジャー活動の特徴について詳細な実証的研究を報告している。またГ. В. オシポフは、ソビエトの労働と余暇問題に関する理論と若干の事例の実証的報告を紹介する中で当面のソビエトの自由時間問題の所在を明らかにしている。P. ホランダールはアメリカおよびソビエトのレジャー研究者の夫々の見解と相互批判を対比的に紹介する中で、両国のレジャー問題に関する論点のちがいを明示している。岡田、辻村、寺谷らの諸論稿は、ソビエトにおける余暇の社会的位置づけについて批判的に論及し、レジャーは遊び(PLAY)よりも仕事(WORK)に近い概念で理解されているとして、仕事中心の価値観に基づくソビエトのレジャー観の問題点を指摘している。

このようにソビエトの自由時間問題に関してはいくつかの論文を通してその概略を捉えることができるが、A. B. ニチェンカ¹¹⁾、E. M. ババソフ¹²⁾らの論ずるように、自由時間の本質に関する統一の見解はこれまでの文献にはなく、ソビエトにおいても未だ未開拓な問題領域であるといえる。

Б. И. ドブソン¹³⁾は社会経済現象である「自由時間」のカテゴリーはイデオロギー闘争の重要な理論的分野であると論じているが確かにそれは第一に社会が存続するうえで欠かせない労働の社会的意義に関する価値認識の問題として、第二にレジャーの性格規定の問題としてソビエトでは政治的にも重要な問題領域であるといえよう。

1. 語 義

一般に英語の [recreation] はラテン語の [recreatio] に由来し、仕事や義務的活動における身心の疲労をとりぞき、再生することとして理解されている。同様に [leisure] は

[licere] に由来し、「許される」ことや「自由である」ことを意味し、フランス語の [Loisir], 英語の [Licence, Liberty] を派生言語としてもつことから、「自由な選択」や「強制や義務からの自由」の意を内在していることが理解される。既に別稿において若干の論議を試みたが¹⁴⁾、こうしたレジャーは社会的歴史的に異なって存在し、たとえば奴隷制社会である古代ギリシャでは、レジャーは極めてアリストクラティックな性格をもち、価値体系の中で基本的な位置を与えられており、労働は二次的、派生的なものとして位置づけられていた。同様に古代ローマにおいても [otium—Leisure, negotium—work] という語にみられるように、当時の生活意識の中では [otium] が根本的なものとして位置づけられていたことがうかがわれる。ところで古代奴隷制、中世封建制、近代資本主義社会と歴史的にレジャーの発現形態は多様に異って存在したが、そうしたレジャーの社会的位置づけ、理論的課題意識の根本的対立点は、労働に対する価値意識の対立に帰着するに思われる。

たとえば今日では、C. K. ブライトビル¹⁵⁾、M. カプラン¹⁶⁾、J. デュマズディエ¹⁷⁾、J. F. マーフィ¹⁸⁾、J. ニューリンガー¹⁹⁾ その他の理論的特徴は、資本主義社会における労働の性格を現代の労働の普遍的な性格として、その非人間性に対比してレジャーの人間的性格に価値的重心を置く。しかしながら、B. И. ドブソン²⁰⁾、A. B. ニチェンコ²¹⁾、A. Л. マクシモフ²²⁾、H. A. パヴェダ²³⁾、H. П. ピシュリン²⁴⁾らソビエトの見解は労働の資本主義的性格と社会主義的性格を峻別する。労働は人間の本質的活動であると捉えるソビエトは、労

表1 時間構造の対照

1. Труд на предприятия в учреждении. Труд в личном подсобном хозяйстве.	労働時間	A—working time, sold time or subsistens time
2. Деятельность, связанная с трудом на предприятии, в учреждении проезд на работу и обратно, подго- товка к работе и т.п.	半労働時間	B—working related time
3. Удовлетворение Физиологических потребностей: сон, еда, уход за собой.	生理的	C—existence time, physiological needs
4. Труд в домашнем хозяйстве и удовлетворение бытовых потре- бностей услуги.	必要時間	D—nonwork obligation
5. Уход за детьми и их воспитание.	仕事以外の 義務的活動	
6. Занятия в свободное время, в том числе: учеба и повышение квали- фикации: общественная работа: самостоятельное творчество и люби- тельские занятия: пользование средствами массовой информации и чтение: посещение учреждений культуры и массовых зрелищ: занятия физкультурой и спортом: пассивный отдых: общение.	レジャー 余暇	E—leisure: free time, spare time, discretionary time

働と自由時間を対立的に捉える理論に批判的立場をとる。

そこでまずはじめに用語の検討、時間構造の対照についてみる。B. Д. パトルシェフ²⁵⁾、S. パーカー²⁶⁾の見解を参考にまとめると表1のようになる。対応する用語について概観すれば、(自由時間—свободное время—free time)、(レジャー=余暇—досуг—Leisure)、(レクリエーション—рекреация—recreation)となる。

ここで外来語としてのレクリエーションについてみると、ソビエトでは次の様に説明されている。「ソビエト大百科辞典²⁷⁾」によれば、英語と同様にその出自はラテン語に由来する。かつては学校における課業の間の休憩時間(перерыва, перемены)を意味したが、今日ではこの用法は廃れているという。また「外来語辞典²⁸⁾」によれば、1) 学校における休暇、休憩時間、2) 教育施設における休息のための場所、部屋、3) 仕事の過程で消費した力の回復、休息と説明されている。その形容詞形は、休息や力の回復に予定されたものとして、レクリエーションタイムとかレクリエーション地域という用例を挙げている。確かに形容詞としての[рекреационный]は用語としても安定して使用されており、рекреационное лесопользование, рекреационная услуга など、文献においてもこの用例は多い。しかしながら O. В. テレホーバの著書「アメリカにおけるレジャー産業」(“Индустрия досуг в США”)における[рекреация]という術語の用例にもみられるように、それは[отдых]と同義の意味で用いられており、むしろ名詞形としては[отдых]が[рекреация]のかわりに多用されていることがみられる。このことから英語と同様の意味においては、名詞形を用いる用例は少なく、文脈に応じてロシア語文献では[отдых, восстановление, досуг, развлечение]その他の用語が使用されていると考えられる。事実、“The Oxford Russian—English Dictionary”²⁹⁾には、[досуг][отдых]の用語は収録されているが、名詞形としての[рекреация]の項目はない。また“Great Soviet Encyclopedia”³⁰⁾にも収録されていない。

次に[досуг]であるが、この用語は一般的に時間概念としてはほぼ自由時間と同義に解されている。社会学的カテゴリーとしては、A. Л. マクシモフのように、自由時間を構成する一部分として限定するのが通例である。一般的な用例については“Толковый словарь русского языка”(1976)等のロシア語解釈辞典や前出の百科辞典類を参照すると、1) 労働や仕事からの解放を意味し、(на досуге=в свободное время)として説明されている。2) 労働以外の自由時間になされる気晴らしや個人的活動という行為概念としても用いられる。ここで如何なる活動を[досуг]とし、[отдых]とするかが論者によって異なるのである。たとえば広義には[отдых]は英語の[recreation]と同様の内包と外延をもつ用語といえるが、狭義の法概念としてはソビエト憲法で「休息の権利」(=право на отдых)として規定されている。具体的には 1) 休憩時間 2) 食事 3) 休日 4) 有給休暇 5) 祭日 6) 割増休暇などである。行為概念としての[отдых]には積極的な活動と受動的な休息の二つのタイプが考えられるが、前出の「ソビエト大百科辞典」(с. 383~384)には[ничего неделение=無為]ではない活動的な内容が望ましいとされている。その意味では余暇善用や健全娯楽という意味をもつ「レクリエーション」に極めて近似した概念といえるが、睡眠や洗濯もその活動内容として理解されているように (A. Л. マクシ

モフ—c. 44), 必ずしも同一ではない。このことが [досуг] と [отдых] のカテゴリーのちがいともなるのである。

そこで、以下ソビエトの各論者の諸見解の素描を試みる。

2. А. Л. マクシモフの見解 (ソ連科学アカデミー経済研究所員)

資本主義における労働時間の長さは労資の階級対立の結節点として決定されるが、社会主義では生産力の歴史的段階によって決定される。自由時間はこの労働時間と共に社会的総時間を構成する重要な富である。それは精神的・身体的発達、ツーリズム、自己啓発、生産合理化運動、活動的レクリエーション、合理的な社交、散歩その他に使われる非労働時間である。しかしながら自由時間は非労働時間 (нерабочее время) と概念的に同一ではない。自由時間は社会的経済的カテゴリーであり、従って生理的必要時間や家事はこの範疇には含まれない。自由時間は [отдых] と同一視することはできないが³¹⁾、[отдых] の一部は [досуг] を構成する活動として位置づけられる。

マルクス・エンゲルスは自由時のカテゴリーに次の4つの時間、1) 全面発達のための時間、2) レジャー (= досуг), 3) 休息 (= время отдыха—受動的, 活動的), 4) 気晴らしの時間などを含めている。

ところでブルジョワ社会学は「余暇文明」(Цивилизации досуг) と称して、資本主義的生産関係と切り離して、この自由時間問題にアプローチしている。この理論の特徴は、資本主義社会における労働と自由時間の敵対的性格から目をそらしている点にある。ブルジョワ社会学・経済学はレジャータイムにおける自由な行為の時間として、特に自由な行為という主観的意識を重視するが、真の自由な行為は社会主義社会においてのみ実現される。ところで人間の人間による搾取のない社会においては、労働とレジャーの距離は限りなく近づくとする主張もあるが、しかしながらやはり労働はあくまでも物質的・精神的富の生産に関連する時間であり、自由時間はレジャーと人格発達のための時間という区別がある。

3. Н. А. パヴェーダの見解 (モルダビ科学アカデミー会員, 哲学・法律部門)

自由時間の定義に関しては、これまでの研究は未だ統一的な見解をもたない。ポーランドの社会学者やわが国の研究者の一部に、レジャーは賃労働、生理的必要や家事から解放された自由時間であり、学習や休息、気晴らし、固有の知的、社会的、経済的、技術的、身体的発達のために自主的に活用することであるとして、自由時間とレジャー (досуг) を同一に理解する見解がある。確かに実際上の区別はそれほど重要ではなく、厳密でもない。たとえば通信制大学や夜間大学で学ぶ労働者にとって、それは彼らにとって全面発達のための時間という意味をもつが、しかしそれをレジャーと呼ぶことができるであろう

か。むしろ自由時を二つの構成要素に分類し、一つはレジャー (досуг), 即ち休息, 労働力再生産機能をもつ側面と, 他の一つ, 即ち人間性の発達とその資質の向上に寄与する側面に分けることができる。前者 досуг は様々なタイプの交際, 趣味的活動, 美的要求の発達に関連する活動等であり, 後者は様々の学習活動や社会的奉仕活動, 知的発明的活動, 科学的文献の読書, 芸術的活動への参加, テレビ・ラジオの視聴などである。

4. A. B. ニチェンコの見解 (レニングラード大学)

ブルジョワ社会学ではレジャー [досуг] を非歴史的な, 永遠の, 人間的自然に基づく本質的カテゴリーであり, 生物としての自然な要求と捉え, その客観的な社会的階級的人格を無視して主観的な心理的体験の問題として理解する。確かに自由時を如何に使用するか, その活動内容は個人的, 個性的であるが, その本質は社会的歴史的被規定性をもつものである。人格が如何に形成されるか, また労働時間や自由時間が如何に当該社会の社会的生産力に規定されるかを知れば, ブルジョワ社会学におけるレジャー理論の誤りは明らかである。自由時間は, その活動内容も含めて物質的, 精神的文化の質に関連する。自由時は人間性の開花のための広がりであり, 労働が富を創造するものというならば, 自由時は富そのものである。

ところでこうした自由時間の資本主義社会における階級的人格は次の点でも明白である。支配階級であるブルジョワジーの自由時間はマルクスも論ずるように大衆の生活時間の労働時間への転化によってつくられる。また失業即ち飢餓への危機としての自由が不自由を意味するように, 資本主義社会における労働時間と自由時間の敵対的性格は本質的なものである。社会主義における基本原理は, 資本主義と異なる生産手段の社会的所有にある。生産の社会的性格と所有の私的所有という敵対的矛盾のない社会においては労働と自由時間の対立は生じ得ない。

社会主義においては, 労働の権利と同時に休息の権利, 人格の全面的発達のための合理的な自由時間の活用の権利が保障されている。

5. Н. П. Пешуринらの見解

自由時間は社会と個人にとっての富である。自由時間には二つの領域がある。一つは教養と社会的奉仕活動等であり, 一つはレジャー [досуг—отдых, развлечения] である。われわれの見解では, このレジャー [досуг] を過度に狭く解釈しない。たとえば, 芸術的活動や創造的活動というようにである。レジャー活動は [отдых] や回復だけでなく, 人間の発達にかかわる活動を含む。従って当然この活動の一部は教養の機能をもつ。

資本主義社会は, 労働階級の自由時間の組織化を, 利潤を得る手段として, また焦眉の社会経済的問題から労働者の目をそらさせる階級コントロールの手段として関心をもつ。社会主義は人類の歴史の中で, 自由時の合理的な活用, 即ち社会成員の精神的要求を満足

させ、その資質の全面的発達を社会の課題とした最初の社会である。従って健全な自由時活動の発達に社会が強い関心をもつことは当然であり、新しい集団主義の形成、政治・イデオロギー教育、思想道德教育に役立てることが望ましい。その意味で有害な自由時活動に対しては徹底した闘い、教育が重要である。

労働への嫌悪は資本主義生産様式にその原因があるにもかかわらず、ブルジョワ社会学者は「機械・技術一般」に求める。これは新しい形式のラッドイト (Luddites) である。むしろ労働の社会的政治的条件が、労働への態度の形成において重要である。従っていたずらに労働の非人間性を主張するブルジョワ社会学「レジャー理論」は誤りである。

6. Б. И. ドブソンの見解 (ソ連科学アカデミー, 国際労働運動研究所)

自由時間のカテゴリーは科学的問題の一つである。一つの俗見は自由時間を「絶対的自由」、即ち「個人的気儘」(Личный произвол) という概念で解釈することである。それは「～からの自由 (свободным от)」あるいはまた「～への自由 (свободным для)」として論じられるが、結局のところ社会的活動からの逃避と、個人の欲求への従属という理論となっている。資本主義では自由時間における自由とは、それを金儲けの源にする自由であり(レジャー産業)、欲望の商品化、肥大化、不健全娯楽の産出であり、従ってその寄生的性格は自由時の内容を貧弱にする。現代の賃労働者の要求としての自由時間には二つの形態がある。一つは身心の再創造であり、一つは自分自身の才能の発展である。

神経作業が中心となる現代の労働の変質は神経性疲労、体力の衰え、心理的抑圧を引き起こし、気晴らしや身体運動への要求の増大ともなるが、同時に「ゴロ寝」(нечегонеделении)「自己逃避」(эскапизма—бегства от себя)としても現われる。資本主義と社会主義のこの問題の解決法のちがいは、前者は人間を消費者 (homo-consumers, человека потребляющего) として規定してレジャー産業、娯楽産業によってここからの利益を吸収する。ここで既に明らかなように、それは一つの悪循環 (порочный круг) である。これに対して社会主義の労働観はオプティズムの立場にたつ。自由な労働 (свободный труд) という共産主義的労働の実現化、即ち労働過程の改善をすすめると同時に、人々の健全な自由時活動を準備する。

7. 結びにかえて

Б. И. ドブソンは社会的経済現象である「自由時間」のカテゴリーは、イデオロギー闘争の重要な理論的分野であると論じている。それは第一に社会が存続するうえで欠くことのできない労働の社会的意義に関する価値認識の問題として、第二に自由時間の社会的性格規定の問題としてである。

ソビエトの理論的特徴は、資本主義国に広く流布している「レジャー理論」「レジャー社会学」を危険視する。それは資本主義的生産関係における労働の非人間性を、労働一般

に固有の普遍的性格と見做して、労働の価値を貶低せしめる理論として断罪されるばかりでなく、自由時間の資本主義的性格を隠蔽する理論としてそのイデオロギー性が論議される。

ところで、こうした「レジャー理論」による労働観がブルジョワ的偏向として批判されることは、労働規範の強化、確立が重要な社会的課題となっているソビエトにおいては自明のことであるとして、自由時間に関するソビエトの理論的特徴を政治主義的に解釈することは誠実な態度とはいえない。実際上の問題として、ソビエトのこうした批判を別にしても、わが国の所謂余暇論も含め、今日の支配的な「レジャー理論」の最大の問題点は、労働の社会的意義をその理論に正しく位置づけ得ないところにあることは事実といえよう。ソビエトの自由時間に関する理論書は、必ず労働の価値について一章を設けているが、西側諸国の理論書は労働について論ずる場合にもその消極的評価から説きおこしてレジャーの人的価値についてアプローチする。

何故働くことが積極的評価を受けないのか。正確には『何故働きすぎることはいけないのか』と表現すべきであろうが、今日では国際的な経済摩擦の問題とも関連して働きすぎる日本人の労働の在り方が否定的評価を伴って『働きバチ』として問題視されている⁸³⁾。

豊かな生活とはなにか。この命題を解くことは難かしい。しかしながら「仕事以外に生き甲斐をつくらなければいけない……。」などと、ゴールドンウィークには必ず展開されるマスコミの「余暇のすすめ」キャンペーンには、なにほどかの苛立ちを覚えるのも事実である。「余暇のすすめ」は、働きすぎるのが人生を貧しくするのだという哲学に支えられているように見受けられる。人生を如何に過ごすか。それは極めて個人的、個性的な問題といえるが、「余暇のすすめ」は一つの強迫観念として今日のわれわれを支配している。

自由時間の問題は社会体制の区別をこえて、政治的経済的ターゲットの一つとして存在しているが、この自由時間の増大を単純に歴史的進歩として、無限定的に肯定して良いものかどうか。労働の本質とも関連してこれはそれほど簡単な問題とも思えない。

ソビエトの自由時間は、一人当たり年間平均1800時間という時代になりつつある⁸⁴⁾。自由時間の定義には「自分自身の裁量によって自由に使用できる時間」(И.С. Кон)⁸⁵⁾、「義務的行為から解放された自由な時間」(Б. Грушин)⁸⁶⁾、「他の目的のための手段ではない、それ自身が価値のある、あるいは自己目的的な活動の時間」(Л.А. Гордон)⁸⁷⁾など、その他様々の定義がなされている。またこの自由時間を構成する領域の分類に関してもこれまでに素描した論者にみたように多様である。しかしながら共通してみられる特徴は、それ自身が価値のある(самоценность)、それ自身が目的でもある(самоцельность)活動のための時間の総称として捉える点である。ここに一つのパラドクスが生起するのは見やすい道理である。即ち、自由な時間の自由な活動は、自由な選択(свобода выбора)を前提とする。自由な選択におけるその自由さの度合は確率論的な選択の中に、客観的にも、主観的心理的にも依存する。まさしくこうした自由さこそが資本主義社会における自由という本質の判断基準を示すものであるが、勿論、ソビエトはこうした自由の捉え方を批判する。アゴーン、アレア、ミミクリー、イリンクスなどのカテゴリーにみられる遊戯(プレイ)理

論の概念構成の中にも、偶然性 (риск, выбор, вероятность, случайность) に自由の本質をみる資本主義的理論特性の一片を見出すのである⁸⁸⁾。第一に自由な選択とはいえ、その活動内容は歴史的、社会的に規定されたものであり、資本主義社会においては既に商品化されたものであり、第二にその要求自体が資本によって歪められ、肥大化したものであり、第三に個人的気儘という自由な選択は真の「集団性」に対立するものとして確率論的な自由論の問題点が指摘される。社会主義社会における自由時活動の自由な選択にしても、常に正しく選択されるとは限らず、アルコール中毒 (алкоголизм) や大酒 (пьянство)、その他の否定的社会現象や反社会的・反文化的活動を招来することが問題とされるのである。ここに自由時活動に対する教育の重要性、われわれの用語でいえば、レジャー教育、レクリエーション教育の重要性が強調される理由が存在するのであるが⁸⁹⁾、個人の自由な選択という問題とその社会的方向づけ (集団による個人の規制) という問題をどの様にソビエトは理論的に解決しているのか。興味のある点である。

本稿においては、ブルジョワ社会学としての「レジャー理論」に対するソビエトの各論者の批判的見解を中心に素描したが、術語上の身分関係など不分明な点が多い。確かに資本主義国の「レジャー社会学」においても、岡田の論ずるように、自由時間・レジャー・レクリエーションの定義は一律ではないが、ソビエトにおいても十分に理論的に整理されているとは言い難い。しかしながらここでは以下のようにまとめておく。1) ソビエトでは活動概念としての「絶対的自由」という概念を否定し、自由の歴史的社会的性格に自由の問題の本質をみる。2) 時間概念としては、図1のようにまとめることができよう。即ち、自由時間 (свободное время) は非労働時間を構成する一部であり、同一ではない。狭義の法概念としての [отдых] の一部、例えば労働時間の中の休憩時間は、労働時間の

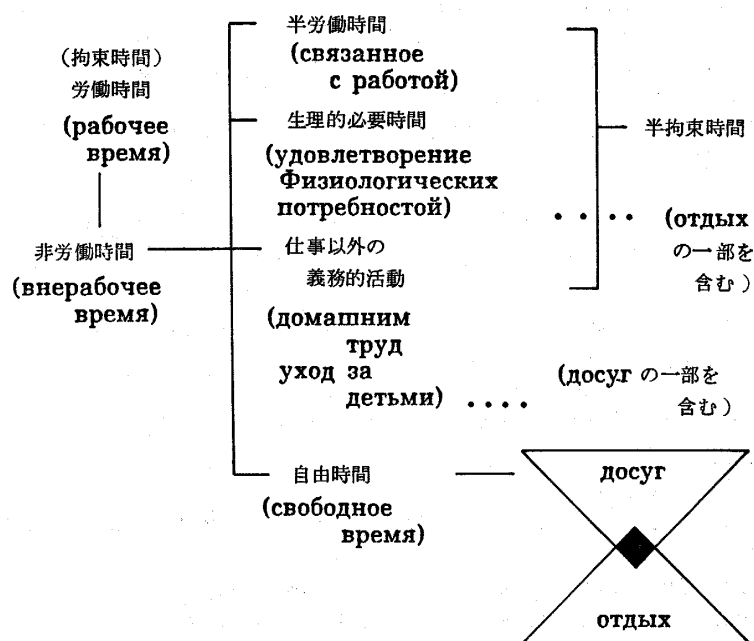


図1

一部として位置づけられているが、この [ОТДЫХ] 及び [ДОСУГ] は広義には自由時間と同一に理解されたり、自由時間を構成する一部と位置づけられたりする。3) [ДОСУГ] と [ОТДЫХ] は、活動概念としても、また時間概念としても、それぞれを一元的に上位、下位の関係概念として位置づけることはできない。なによりもそれらは具体的な活動、行為の評価の問題でもあり、従って論者の理論的立場の相違によって、なにを [ДОСУГ] とし、なにを [ОТДЫХ] とするかが異ってくる。4) 活動概念としては、生理的・必要時間の一部に ОТДЫХ が、子どもの世話の一つが ДОСУГ として位置づけられたりする。

もちろん、ソビエトにおける自由時間に関する実証的研究、タイムバジェットの研究は、アメリカ・ヨーロッパのレジャー社会学に劣らず活発であるが、その点に関する検討は本稿では省略する。

注

- 1) Б.И. Дубсон. *Социально—экономические проблемы свободного времени трудящихся в условиях современного капитализма*. М. Наука. 1980. С. 16 より転引用。
- 2) К. Маркс, 藤野訳「経済学・哲学手稿」国民文庫, 大月書店, p. 98
- 3) 日本余暇学会編集, 「新時代の余暇」第一法規, s. 50 その他 M. Mead, “*The pattern of Leisure in contemporary American culture*”, Mass Leisure. The Free press. 1958. p. 10-15.
- 4) К. Маркс, 全集刊行委訳「資本論」第7篇, 第48章, 大月書店版, p. 1051.
- 5) J. Zuzanik, *Work and Leisure in the Soviet union, a Time—Budgeted analysis*. Praeger, 1983.
- 6) P. Hollander, 江藤訳「アメリカ社会とソビエト社会」(2), 鹿島出版会, S. 47
- 7) 辻村明「ソ連を悩ます余暇」『月刊エコノミスト』所収, 1978. 8月等, p. 122-27
- 8) 寺谷弘士「ソビエトの余暇」『レジャーの思想と行動』(石川弘義編), 日本経済新聞社所収, S. 48, p. 228-64
- 9) 岡田至雄「レジャーの社会学」世界思想社. 1982
- 10) Г. В. Ошпоров編, 田中訳「ソビエト社会学」第2分冊, 青木書店, 1967
- 11) А. В. Неценко, *Социально—экономические проблемы свободного времени при социализме*. Изд. Ленинградского университета, 1975
- 12) Е. М. Бабосов, ред. *Свободное время и духовное богатство личности*. Мн.: Наука и техника, 1983
- 13) Б. И. Дубсон. укол. соч.
- 14) 拙稿, 「レクリエーション, レジャーに関する一素描」横浜国立大学教育紀要, No. 13
- 15) С. К. Bright Bill, *Man and Leisure: a philosophy of recreation*. Greenwood. 2nd. 1977, p. 19-38
- 16) М. Kaplan, *Leisure theory and policy*. New York. 1975. p. 63-100
- 17) J. デュマズデイエ, 寿里他訳, 「レジャー社会学」社会思想社. 1981.
- 18) J. Murphy, *Concept of Leisure*. Prentice-Hall, 1974. p. 136-151
- 19) J. Neulinger, *To Leisure: an introduction*. Allyn and Bacon. inc. 1981
- 20) Б. И. Дубсон. укол. соч.
- 21) А. В. Неценко. укол. соч.
- 22) А. Л. Макшимов, *Рабочее и свободное время в условиях развитого социализма*. М.: Наука. 1981
- 23) Н. А. Победа, *Свободное время. как мы его используем?*. Изд. Штиинца. 1978
- 24) Н. П. Пишулина. Ред. *Человек, свободное время и профсоюзы*. М.: Профиздат. 1980
- 25) В. Д. Патрушев. там же. с. 28
- 26) S. parker, *The future of work and Leisure*. London. 1971. p. 20-30

- 27) *Большая советская энциклопедия.* (36), Государственное научное Изд. 2е-изд. 1955. с. 321
- 28) *Словарь иностранных слов.* 7е-изд. М.: Русский Язык. 1980. с. 436-37
- 29) *The Oxford Russian—English Dictionary.* Clarendon press. 1978 版。
- 30) *Great Soviet Encyclopedia.* vol. 8. Maccimillan. London. 1975 版。
- 33) А. Л. Макшимов. указ. соч. с. 44 に論じられているように, [отдых] という用語は広狭二様に用いられ, 例えば法概念として使用される場合でも, 休息の権利としての労働時間における休憩 (смены на отдых も含む) は労働法上, 労働時間としての位置づけられており, 自由時間と同一視できない。
- 32) テレビ・ラジオの視聴が教養を高める時間として捉えられることは, 今日のがわのプログラムからは理解できないが, ソビエトの番組を知れば, こうした分類の妥当性が首肯され得る。
- 33) 最近では, 1985年4月26日付の朝日新聞に, 「仕事以外に生きがい。どうする余暇時代」とする記事に併せて, 通産省が「働きバチに休みの勧め」の積極的音頭取りを開始したと報道されたりもする。
- 34) Е. М. Бабосов. указ. соч. с. 5
- 35) И. С. Кон. *Социология личности.* М. 1967. с. 347
- 36) Б. А. Грушин. *Свободное время.* актуальные проблемы. М. 1967. с. 15
- 37) Л. А. Гордон, Э. Б. Клопов. *Человек после работы.* М. 1972. с. 84
- 38) Е. М. Бабосов. указ. соч. с. 40-41
- 39) В. В. Заикин. *Свободное время и проблемы воспитания: организация досуга по месту жительства.* М.: Профиздат. 1983.

各人にとってはもちろん, 社会全体にとっても, 有意義な自由時活動の在り方は重要である。しかしながら, 社会主義的な自由時活動は, 同時に資本主義社会における労働の在り方とは異なる社会主義的な労働, 即ち「自由な労働」(свободный труд) と一対をなすものである。それでは「自由な労働」とはなにか。古典的規定としては, ドイツイデオロギー (国民文庫版, p. 64) にみる「あしたには狩りをし, 昼には魚をとり, ゆうべには家畜を飼い, ゆうげの後には批判をする……」という全面的に発達した人間の可変的な労働を意味しているようにも見受けられる (Е. М. Бабосов. 前掲書, p. 42)。A. クラレは既にそこでは労働する者はたんに「労働者」ではなくて全人格 (Gesamtpersönlichkeit) と見なされるというが (藤野訳, 「マルクスの人間疎外論」岩波書店), 「自由な労働」の客観的条件とその主体的条件, たとえば Е. М. Бабосовの論ずる労働に対する肯定的感情 (положительные эмоции) をどう創出するのか。ソビエトの自由時間に関する理論は, 労働の本質規定に関する マルクス・エンゲルスの教義の解説がこれまでも支配的であり, 「自由な労働」の客観的, 主体的条件を明らかにし得ていないともいえる。従っていたずらな健全娯楽の唱導は, ソビエトの批判する「レジャー理論」とまさに同様な問題点をかかえているともいえるのである。